

～東日本大震災と私～

作成者 I . R

- 地震の前
- 地震直後
- 家までの帰路
- ライフライン復旧まで
- ライフライン復旧後
- 3ヶ月後の自分の生活
- 情報格差について
- 知ること
- 忘れないこと

クリックするとその項目に飛びます。

<in English>

1. I spent usualness time when the big earthquake occurred. Earthquake that we had never experienced occurred between 5th class and 6th class. So, we had to go home soon after it occurred. But the network of transportation and communication and phone didn't keep the function. So I spent a long time without contact to my family. After a while my father and mother got to school. While we went to home, I saw the sky. The sky was very vast and beautiful because the electricity didn't work at all. After the electricity came back, I watched the TV. TV broadcasted about the earthquake. I was shocked without saying a word.
2. Three months have passed since the earthquake. I became a high school student. Fukushima began to recover.

I think that it is important for modern society to know information. Information is especially important in this situation.

I want the government to provide information to people who need information.

3. *Things we can do for victims is two things. One thing is to know about earthquake. Other thing is not to forget it.*

Dead people are not reborn. So we should be alive in the long future.

1. 地震当日の私

3月11日私は普段と変わらない日常生活を送っていた。卒業式も間近でみんな気持ちは弾んでいたように思える。そして、その日の給食はバイキングでみんなたくさん食べた。普段とは違う給食にみんなうれしそうだったのを覚えている。バイキングの後は体育の授業だったと思う。中には一部の男子が「食い過ぎて、走れね〜よ」などたわいもないことをいっていた。とてもものどか日々だったと思う。誰がこの日に M9.0 の大地震がくると予想できただろうか？地震が起きたのは、ちょうど5時間目と6時間目の間のことだった。

蛍光灯の明かりが突然消え、大きな揺れが起こったのである。教室は一瞬の沈黙の後、動揺と不安が教室を包み込んだ。日常を非日常が飲み込んだのである。生徒、教員ともに机の下に身を伏せた。大きな横揺れはしばらく続き、私たちを肉体的にも精神的にも、揺れ動かした。私は、生涯これより大きな地震は体験することはないだろうと思うほどだった。事実それは本当のこととなるだろう。こんな震災は、そして何よりもこんな被害はもう二度とでてほしくない。長い地震が終わった後、生徒は体育館に避難した。なかには途中、恐怖で泣き出すものもいた。そして、生徒たちは各自家へと帰ることとなった。

しかしそこでも問題が生じる。横手の電気も止まり電話回線もパンク寸前で、交通網、通信網ともに麻痺していたのである。親への連絡も付かないまま、長い時間を過ごした。そして、3時間ほどたった後、やっと父母が到着した。そして、帰りの道中、私たち家族はこれからどのように暮らすかを心配した。予想していたとおり、コンビニなどの日用雑貨、食料品はすべて売り切れていた。帰りの道中は皮肉にも町の灯りがすべて消えたせいで、星々がとても輝いていた。まるで、死者の魂を弔うかのように。情報網が麻痺していたせいで、そのときはそのことを知るよしもなかったのだが。

家へ帰ったら、ろうそくの明かりで、食卓を囲んだ。食料もなく明日の暮らしすらわからない日々。まるで、文明が3世代も退化したかのようなようだった。

その後の一日は電気の全くない生活となった。幸いにも我が家にはだるまストーブがあったので、それで暖をとり寒さをしのいだ。その日の夕方には電気が復旧した。そして、一番にテレビをつけた。もちろん、今の全国の状態を知るためである。私はテレビから流れる映像に漠然とした。正直な話、これほどまでの事態とはつゆほどにも思っていなかったからである。テレビには、死者と行方不明者の数が載っていた。それは、もはや、統計上の数字と成り下がっていた。15,365人。その一人一人の悲しさや苦しさを感じるこ

とはできない。それはあまりにも大きすぎるからだ。あまりにも死者が多すぎて、人が死んだという感覚さえぼやけてしまうほどに、この大震災は大きな爪痕を残したことをそこでわたしは初めて知ったのである。

2. 地震後3ヶ月後の私の動き

今やあの大地震から、3ヶ月がたとうとしている。被災地では、津波による廃材の撤去がすすみ、仮設住宅などが建てられていった。(それに関しては渡井のつたない文章より、[こちらのウェブページ](#)のほうが有益だと思う。) それに対して私は、中学校を卒業して高校生になった。そして、なれないながらも高校生としての日々を過ごしていた。この3ヶ月世の中では、めまぐるしいほどにいろいろなことが起きた。その一つ一つはとても重要なことで、また大切なことだった。

その中で私は感じたことがある。それは、現代社会が情報社会であるということだ。いまや、世界はインターネットという緻密な網で世界はつながれている。そのおかげもあって、遠くの情報もすぐ手に入れることができるし、必要な情報を諸メディアから入手することができる。しかし、その中で気になることはメディアをみることができない者たちである。いわゆる情報弱者である。デジタルデバインドである。情報格差というものはこのような大災害において深刻な影響をもたらす。持つものは有利に避難して生活できるのに対して、持たざるものは情報を持たないせいで、危険な目に遭い、最悪死んでしまうかもしれない。このような事態が起こらなかったからこそ、今まで情報格差というものはあまり大きく取り上げられなかったが、改めて私は情報というものの現代社会に与える影響を思い知ったのである。もちろん、情報を持たないという選択をすることも自由だ。しかし、私が問題だといっているのは、情報を持ちたいのに持つことができないという人たちである。このようなしたくてもできない人を減らしていくことが大切であると私は感じたのである。

3. 今私にできること

今回の震災に対して私たちができることはたくさんあると思う。その中で私が特に大切だと思うことは二つある。一つは「知ること」二つめは「忘れないこと」である。

知ること。それは知識を得ることである。この大震災から私たちは様々なことを体験した。地震を体験したということの主観的に考え感じることも大切ではある。しかし自らの一方的な見方だけでなく、より公の見方からこの大震災をみるのが大切だと思う。今の社会は情報化社会なのだから、手軽に大震災のデータを得ることができる。そんな恵まれた状況にあるのだから、この大震災について情報を入手し、より多くのことを知ることが大切だと思う。

忘れないこと。それは、記憶を後世に語り継ぐことである。未曾有の事件も人々は忘れてしまう。それは、生物的に仕方のないことなのかもしれない。いやなことは忘れてしま

いたいという人の脳に最初から植え受けられている防衛本能なのかもしれない。しかし、絶対に忘れてはいけないこともあるのは事実である。人の記憶というものは曖昧で忘れてしまう。何世代も語り継いでゆくには信頼性にかけるものだろう。しかし、今に時代にはコンピューターがある。インターネットがある。インターネット上にあれば、インターネットという緻密な網のすべてが崩れなければ、データは消えない。データにすれは物理的劣化を受けない。それに、この瞬間を記録すれば、記憶を語り継ぐことができるだろう。

大震災を知り、考え、忘れなければ私たちはこれからの人生に対して大きな影響を当てることになるだろう。そして、人生を生きる上で大きな糧となることだろう。死者の命はよみがえることがない。それならば、その死を糧として明日の未来を生きることが大切だと私は感じる。過去の出来事を道しるべとして、未来を紡いでいくことが死者の魂を弔うすべだと思う。